

つねに善き友にありて、心を愧^はじしめられよ。
人の心は、おほく悪縁によりて悪しき心のおこるなり。

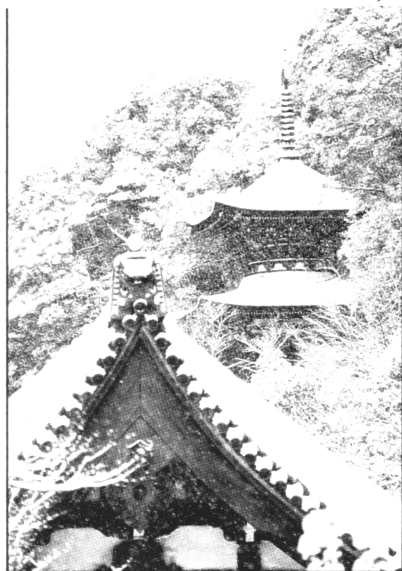
——法然上人・十二箇条問答——

悲しみは二人で分けると半分になり、喜びは二人で分けると二倍になります。そんな「善き友」を、あなたはもちますか。

世の中には、善人・悪人とはつきり区別できる人などいるはずはないのですが、私にせつかく与えられた「よりよく生きる可能性」をのばしてくれような人に近づくことが、究極的には私を高め、ほんとうに生きる喜びを共有することにつながるのです。

「あなたに会えてほんとうに良かった。人間として生きているありがたさをしみじみ教えて頂いた」と言える人を、あなたは何人持つていらつしやるか。

たった一度の人生です。真の「善き友」に助けられて、悔なく生きていきたいものです。



阿弥陀堂と多宝塔



図 槃 涅 仏

我こゝろを南無といひ

彼の仏の我を摂したまふをば

阿弥陀といふ

(略安心鈔)

あるとき、親戚一同が集まったことがある。そのときに娘にわかりやすく人間関係を説明してみた。最初はわかつているようだった。四世代が集まってみると頭がこんがらがってしまったらしい。九十になった祖母に「このおばあちゃんのお母さんは？」私はお仏壇の位牌をさした。「そのまたお母さんは？」私は阿弥陀様をさした。「みんなく阿弥陀さまから生まれて、阿弥陀さまに見守られてこうして生きているんだよ、全部阿弥陀さまの子供なんだ……」大いなる血族の流れのなかで、父母に生かされ生きている。見えない血液が「ころ」のなかを流れている。ひとりひとりの生命のなかで、阿弥陀様の手足が動く。涙も汗も、阿弥陀さまのもの……



阿弥陀二十五菩薩来迎図

南無というは、正しき我等が体なり。即ち三
心なり。故に此の南無が阿弥陀佛の体に具せ
られて名号となるぞ、と心得る所が、往生に
であるなり。

——西山上人 述 誠——

「人と人との付き
合いは「折れ合う」
んじゃない、「織り
あい」なのです」
ある人がこう言われ
たその言葉をいつも
思う。

——人と人との心の触れ合いの中で、あた
かもそれは、京都の西陣織のように、タテ
糸とヨコ糸が織り合って、すばらしい人間
関係をつくっていくというのです。

私たちはいつもアミダさまの大いなる願
いの中に、しっかりと抱きかかえられてい
ると心に思うとき、すばらしい安心の世界
が私の目の前にあらわれてくるのです。
それが南無阿弥陀佛なのです。



勅使門と多宝塔

ねんぶつしゅじょうさんごう
念仏衆生の三業と

みだによらいさんごう
彌陀如来の三業と

あいはなれず

—— 安心決定鈔 ——

私たちが弥陀の名を呼べば（しやう称）、阿弥陀仏は必ず聞いて下さいます（もん聞）し、また私たちが弥陀を礼拝すれば（らい礼）、間違ひなく見て下さいます（けん見）。また私たちが弥陀に心をかければ（ねん念）、弥陀は疑いなく知って下さいます（ち知）。

右の称・礼・念を念仏衆生の三業（三つの行為）といい、聞・見・知を弥陀の三業といいます。しかるに弥陀は、私たち衆生を一人も洩らさずに救い、とることができない限り、自分は決して仏の位にはつかぬと誓われて、そして仏となられた方です。

されば、「衆生の三業と弥陀の三業とあいなれず」というのは、衆生と弥陀とが偶然一致するといったケチなものではなく、初めから、この私と弥陀とは強い絆で結ばれているのです。

この思いを心に頂き、お念仏を喜んで頂きたいものであります。



総本山 禅林寺第八十五世法主猊下晋山式(庭儀式)

たとい身は、諸の苦毒の中に止まるとも、
我が行は、精進にして、忍んで終に悔ざらん。

——無量寿經——

「仏教の目的は一つだ。山にたとえれば、その頂き
は同じ、登山道は色々ある。いくつかある登山道の違
いが、宗旨の違いである。だから、どの登山道も同じ
である。」とよくいわれます。ソーでしようか。登山道
によつては平坦なコースもあれば、険しいコースも、
また、現代ではヘリコプターによつて、一息に頂上と
いうコースもあります。

「どの登山道も同じ」といういい方は、仏教の各宗
旨を一般的に、全体的にとらえて、頂上が同じなら、
道も同じと錯覚しています。仏教は個人の問題です。
私・たちにはいくつもの登山道があるでしょう。しかし、
私にはただ一つの登山道しかありません。お念仏の登
山道、ただ一つであります。



永観堂禪林寺総門

一すじに極楽をねがい、一すじに念仏して、
このたび必ず生死しやうじをはなれんとおぼしめすべき也。

——法然上人——

まだ制服が身になじまない一年生の初はつ々しきは、新緑にも負けず鮮あざやかで、ほほえましいものです。思えばみんな、あんな時代があった……のでした。

それにしても、子供たちの、特に幼児のはっとさせるような可愛さ、輝くような表情はどこから来るのでしょうか。それは多分、刻々と新しく生きつづけるいのち、そのものの表情だからではないでしょうか。子供が泣いても笑っても、何をしても自然でいつも初々しいのは、一すじに、一途いちずにいのちそのままに生きていくからではないでしょうか。

一すじに生きたるひとの尊さ
一すじに歩みたるひとの美しさ
われもまた
一すじに生きん
一すじに歩まん

(坂村真民詩集より)
総本山 永観堂 禪林寺

浄土真宗の行者は、

まづ本願の起こりを存知すべきなり。

(訳) 浄土真実の教えを心の糧に頂こうとする人は、本願の謂われを知っていなければなりません。

——安心決定鈔——



中 門

例えば、摩天楼に上るとしましよう。それには自分の足をたよりに階段を一步一步のぼって行く方法と、エレベーターに乗って行く方法と、二通り、しかし相手は摩天楼のこと、どちらが確実に到達できるかといえ、言うまでもなくエレベーターです。とすれば、摩天楼を前にして、「エレベーターで行け」と勧めるのが真実の教えです。しかもそのエレベーターは、あらゆる非常事態を想定して万全を期してあるとすれば、どのような人であれ、「頂上展望台」まで間ちがいなく到達できます。千人が千人ながら到達できるといふことを指して、真実の教えというのです。この、あらゆる非常事態を想定して万全を期して作られたエレベーター、これが「本願」です。そしてこの「エレベーター」を万人のために御用意くださって、「これに乗って行け」とお勧め下さるのが阿弥陀如来であると申せば、阿弥陀如来のみ心（＝本願の起こり）が分かるというものです。ここを共に頂こうてはありませんか。



庭園

憍慢と弊と懈怠の者は

もつてこの法を信じ難し (大經)

子どもの無心な姿を見ると、あんなに天衣無縫に遊びたいと思い、子の母の名を呼び懐に飛び込んでゆく様を見ると、憧れとともに目頭を熱くするのは私ひとりだろうか。

いつしか、おごりたかぶり、人をあなどり、良くないこともわかりながらし、なまけおこたる人となる。そして何も信じない、信じられない人になってゆく。寂しいことだと思ふ。帰ってゆくとところがない魂を持つ人は、浮き草のように放浪の旅人である。それよりもこころの片隅にいつでも帰ってゆけるところ、白蓮華の花のような信じられる真心を持っているとき、人はこの世情や逆縁にめぐりあつても、さわやかにすずやかに生きられはしないか。それが阿弥陀さまという仏だと気づいたとき、その人は光り輝く。



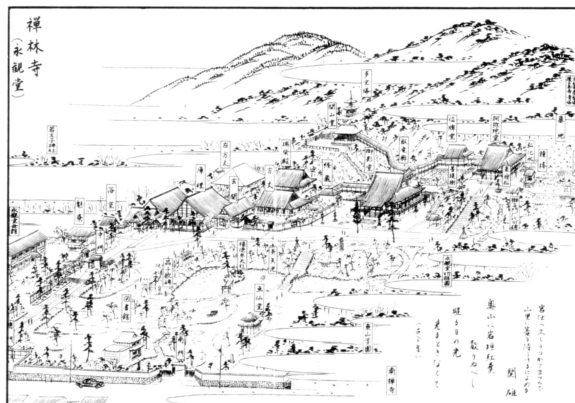
阿弥陀菩薩の内の一菩薩

世間の人民は にんみん あい因り寄生して
共に天地の間に居る
処年寿命は よく幾何なることなし

無量寿経

なえてやろう。』と、その若い坊さん連れて、美少女の家を訪ねました。ところが、その美少女は三日前に亡なっていました。その美少女の両親は娘を愛するあまり、死体をそのままにしていましたから、悪臭が鼻をつくばかりでありました。その時、仏さまは若い坊さんに向って、『よろずの事、無常転変一呼吸をまたない。』と、静かに語られましたと。私たちは、お念仏との出会いに、はやく気が付きたいものであります。

あるところに、一人の若い坊さんがいました。ある時、美しい少女を見て、恋をしてしまい、その結果病氣になつてしまいました。それを見られた仏さまは、『お前の願いを



禪林寺全景図

哀^{あわ}れなるかな電光の命草露の朝を待^{まち}が如^{ごと}し
 四生無常^{ししようむじよう}の形生^{かたちしよう}あるものは死^しに帰^きす

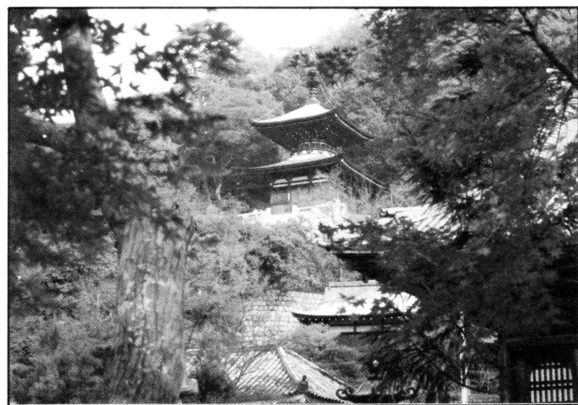
—— 西山上人御法語 ——

「この世は無常だなあ」と不幸があつたときだけ私たちは口に出します。本来「諸行無常」とは、全てのものは時の流れとともにことごとく移り変っている、ということですよ。何も人間の生命の生死だけではありません。

ある日突然雨が降りだしました。下校中の小学生を見ていますと雨にぬれても平気な顔をして、友達とふざけ合いながら帰っていききました。筆者が小学生のころは、急に雨が降り出すとよく「雨やどり」をしたことを覚えています。そう思うと今どき雨やどりをしている姿をみることは本当にまれになってしまいました。「雨やどり」という言葉。今の子どもたちにはもう死語になってしまったようです。辞書の上だけの言葉になってしまったようです。

すべてのものは移り変わる。何一つとして常住のものはありません。その中でもう一度私の生命をふり返ってみたいものです。

総本山 永観堂 禪林寺



多 宝 塔

ぶつたい
仏体より成せし願行の薫修が、一声称仏の
あら
ところに現われて、往生の一大事を生ずるなり。

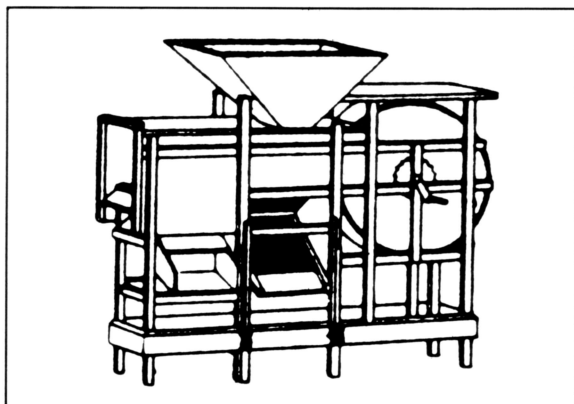
——安心決定鈔——

ある寒い日の野外遊園地、そこは山腹を利用した広い所です。しかし時節がら、訪ずれている人は極めてまばら。電動式の遊具はすべて止まっています。

そんな時、木の間がくれに見える大観覧車の方から、静けさを破って、「乗せてー」という幼児の声が聞こえてきました。「動かせて」といつてるのでしょうか。でもどこから係の人は出て来ません。やがて、その子もあきらめたのでしうか。遊園地は何事もなかったように、また静けさに包まれました。

ひるがえって、阿弥陀仏の御眼は、何時であろうと何処であらうと、また誰であらうと絶えず私たちに注がれているのです。この理を信じて一声でもお念仏を称えましょう。それであなたの往生は、もう叶っているのです。

総本山 永観堂 禅林寺



(唐箕)

念仏三昧とは、自の行にあらず。
ただ阿弥陀仏の行を行ずるなり。

——安心決定鈔——

生前励んだ念仏を袋一杯つめた人が、閻魔大王の前で極楽行きか地獄行きかの裁きを受けています。本人は当然極楽行きと思っています。

そこで閻魔大王は、その「中身」を吟味すべく唐箕とうみ（脱穀した米をモミがらと玄米とにより分ける農具）にかけました。するとどうでしょう。その念仏たるや、ことごとくモミ捨て口から飛び出ていき、米取り口から出て来たのは、たった「一粒」という始末です。

その「一粒」は、閻魔さまの調べによれば、激しい雷を伴った夕立ちに遇ったとき、恐きの余り心底から「ナムアマミダブツ」と称えたものだったそうです。あとの念仏はすべて、「カラ念仏」だったわけです。

さて、閻魔さまのお裁きはどうだったでしょうか……。

ともあれ、私たちの称える念仏は、自身の行としていかに励もうとも、所詮はこの程度でしょう。

しかし、このような念仏であつても私たちが往生できるのは、それは念仏が、私たちを往生させるために果たして下さった、阿弥陀仏の行をそのままに行ずるからなのです。